

評価項目 1	（ア）体系的な履修を促す科目編成となっているか （イ）開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）外国語準学科では従来 IRIS(『言語コミュニケーション科目の手引き』)で、卒業までに履修すべき、あるいは履修可能な科目の体系的な履修を促してきた。初修外国語Ⅰ～Ⅲでは易から難への科目編成となっており、英語の必修科目（「英語Ⅰ」）についてはプレメントテストを活用することで実力・関心に応じた科目・クラスを履修できるよう工夫している。英語の選択科目（「英語Ⅱ～Ⅲ」）については、Ⅱで興味関心や必要性に応じた科目を履修し、Ⅲでは、科目数は限られるが、さらに高度な内容が学習できる編成となっている。しかし、初修・英語とも科目数に限界があることから特色ある科目の設定が不十分で、加えて英語では、履修希望者すべてを受け入れられない科目が生じるなど課題は多い。

（イ）言語コミュニケーション科目では、「開講科目数」と共にクラス数の問題が大きく、言語によっていくぶん事情は異なる。ドイツ語、フランス語はほぼ適正といえる一方、中国語、コリア語では履修登録者数に比してクラス数が少なすぎ、英語は一回生必修科目のクラス数はほぼ適正だが、二回生以降は科目によりクラス数が不足している。これを「専任教員の(非常勤管理も含めた)担当状況」という観点から言えば、中国語、コリア語、なかでも英語に関しては科目・クラス数が圧倒的に多すぎ、「適切」ではないと言わざるを得ない。

【成果が上がっている点】

（ア）初修外国語については二回生まで続けて履修する学生が総じて増えていること、他大学との成長実感比較（21年度「やや増えた」以上が本学 64%、他校 44%）などから、それなりに成果は上がっていると考ええる。

（イ）特になし。

【課題となっている点】

（ア）科目数が限られているため、内容が狭義のことばの学習に留まっている。「コミュニケーション科目」の目標が異文化理解にあるとすれば、文学、文化、時事問題などの科目も配置する必要があるだろう。

（イ）非常勤比率が 70～80%という高い状態が続いており、専任数の不足が常態化している。

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 カ年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 カ年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ・大学院アンケート ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

外国語準学科に係る DP は、汎用的技能「母語以外の特定の外国語が運用できる」と、対話・相互理解の「対話・議論を通して、他者（異文化も含めて）との相互理解・協調に努めることができる」であるが、前者については「ALCS 学修行動比較調査」で 3.57 という低い数字となっている（「アセスメント Book」p.9）。会話を主とする発信型運用については、英語、初修外国語ともほぼ実感に合致するものである。後者については 4.24(同)と比較的高いが、回答者が「異文化」をどれだけ意識して回答したかは不明で、修得度は判断できない。また、「アセスメント Book」の(卒業時満足度)「語学力が向上する授業・制度が充実している(p.54)」は英文科で高い数字(61.7%)を示しているものの、全体では 33.9%と低い。特に食物栄養学科では「満足」が 18.5%に対して「不満」が 38.4%を占めている。「国際感覚が身につく授業が多い(p.53)」でも英文科のような例外(55.8%)はあるものの、家政学部を中心に総じて低い(28.9%)。

【成果が上がっている点】

言語コミュニケーション科目を卒業回生まで選択する学生が少ないため、最終的な満足度は実感としては掴みにくい。必修の一回生時に限れば家政学部も含め、満足度は比較的高いと思われる。

【課題となっている点】

卒業時、外国語の実力がついたとの実感が英文科、史学科を除き低い。それ以上に問題なのは、そのことを不満に感じている学生もさほど多くないという事実である。「学生生活実態調査(2018, p.87)」の「外国語の科目配置が多様で授業方法に特色がある」で「ややそう思う」以上が 35.9%に留まっている点にその原因を求めることができよう。「授業方法に特色」は準学科が独自に取り組む課題であろうが、「科目配置が多様」は全学的な問題であり、学科の努力には限界がある。一方、上述の「語学力が向上する授業・制度が充実している」で「不満」が全体の 23.6%、「国際感覚が身につく授業が多い」では「満足」と「不満」が同じ数字(28.9%)となっている。これは「不満」と感じている学生もさほど多くないということであり、国際感覚を身につけることに興味がない学生も多いことを示唆している。まずは DP の一として、その必要性を学生に認識させることが急務と思われる。

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・成績分布（G P A ・得点）（科目群別・3 カ年） ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)専任に関しては言語ごとに適切に実施されている。また中国語、コリア語では非常勤講師が担当するクラスも含め、一回生を対象とする選択必修科目では統一試験を行い、成績評価の均質化を図っている。しかし、非常勤講師が担当するクラスについては、全体会議などで強く依頼はしているものの、フィードバックの徹底、最終的な合否判決の統一は難しいのが現状である。

(イ)クラス間の成績分布については、(ア)に記したとおり非常勤講師間で若干の偏りがあり、言語ごとにそれを克服する努力が行われている。一方、言語間の偏りについては、特に一回生では言語によって評価にばらつきがみられるものの、言語別全科目の平均をみれば、不合格者率をはじめ大きな偏りはないと言える。

【成果が上がっている点】

(ア)非常勤講師を含めた全体会議によりある程度は是正。

(イ)言語間ではこれまで成績評価基準について申し合わせたことがなかったにもかかわらず、不合格者率はほぼ 5～6%の幅に収まっている。

【課題となっている点】

(ア)非常勤講師全員に徹底することは難しい。

(イ)全体会議などを通じて不合格者数、不合格の理由などを確認し合うことで、偏りを抑えるべく努めている言語もあるが、結果に結びついていないかとなると難しい。また今後は言語間でも、成績評価基準をどうするかについて検討していく必要がある。

担当部局

外国語準学科

評価項目 4	(ア) カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 (イ) 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・ 授業担当一覧 ・ 科目群別非常勤比率（3 カ年程度） ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)言語コミュニケーション科目の場合、どれが主要とは言えない。初修外国語においては、上級回生は専任教員が担当するようにしている。英語については、選択科目の「英語Ⅱ」では、各科目で扱うスキルや分野に詳しい非常勤講師を配置している。「英語Ⅲ」の大部分は専任教員が担当している。

(イ)上述のように非常勤率は70～80%と非常に高い。

【成果が上がっている点】

(ア)特になし。

(イ)特になし。

【課題となっている点】

(ア)初修外国語の二回生以降の科目を選択する際、一回生時担当教員のクラスを希望する学生が少なくない。そのため、当該教員が非常勤講師で上級回クラスを担当していないと、継続履修をやめるというケースもある。

(イ)科目数・クラス数に比べ専任数が少ないため、非常勤率は不可避免的に高くなる。

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

国際化の推進および外国語能力の向上は大学全体の目標であるが、現行の語学教育体制は限界に来ているように思われる。授業形態の見直しなどによる大幅なカリキュラム改革を検討するべきであろう。